

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

日時：2017年2月17日(金) 13:00-18:00, 2016年2月18日(土)10:00-15:30

場所：AA 研マルチメディアセミナー室 (306)

使用言語：英語

以下は各発表者自身による要約である。

2月17日

13:00-14:30 Chair: Makoto MINEGISHI (ILCAA)

Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University), “Iron” in Asia: Overview”

本発表では、第1回の会合において発表があった「鉄」の項目について総括を行った。いくつかの地域の情報は今後補うこととするが、現在までのところ集まっている地域のデータから言えることは、漢語の「鉄」の上古音に由来すると思われる形式が東アジア・東南アジアの広い地域に広がっていること、モンゴル・チュルク語によって中央アジアの広い地域に同一語源の形式が広がっていることなどが分かった。ただし、東南アジアなど小さな地域で独自形を持っていることもある。

Atsuko UTSUMI (Meisei University), “Iron in Austronesian”

Word forms that refer to “IRON” in Austronesian languages can be categorized into nine groups, three of which are loan forms from English, French and Chinese. Loan words are most often found in Oceanic languages which show the very recent introduction of the material “IRON”. In Austronesian language speaking area in Southeast Asia, five groups of form is found, but it is not clear which group is the reflection of the oldest proto-form. In Indonesia, the word form similar to “besi” is widely spread. In Taiwan and Philippines, the form similar to “balayān”, “namat” and “salsalen” are found.

Keita KURABE (ILCAA Joint Researcher), “General remarks on means to count nouns in Asia”

地理言語学に基づく類別詞の先行研究をまとめた後、まだ明らかにされていない課題について述べた。先行研究として、地域特徴、地理分布、普遍的語順、地域的語順、歴史、通時的解釈などの観点から類別詞を考察した研究をまとめた。また、今後明らかにすべき課題として、より詳細な分布、境界の特定、境界現象、地理分布の通時的解釈、普遍的語順の検証と説明、変異、類別詞の起源などがあることを述べた。

14:45-16:15 Chair: Rei FUKUI (The University of Tokyo)

Hidetoshi SHIRAISHI (ILCAA Joint Researcher, Sapporo Gakuin University), “Means to count nouns in Nivkh”

ニヴフ語は類別詞が比較的多い言語として知られており、その数は先行研究において

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

24とも26とも報告されている。類別詞は多くの場合、数詞と音韻上不可分な1音節の形態素を構成する(順序は常に数詞—類別詞)。主要部名詞との順序は数字により異なる。1から5までは名詞—[数詞-類別詞]であり、6以上は[数詞-類別詞]—名詞である。方言分布は、概ねアムール方言とサハリン方言の方言区分に合致する。

Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, Chiba University), “Means to count nouns in Ainu”

アイヌ語の類別詞は、人間(HUMAN)か非人間(NON-HUMAN)かという観点で大きく二つに分類されている(Aikhenvald 2003: 286)。前者を -p/-pe で表し、後者を -n/-iw で表す。アイヌ語の数詞は連体的に用いられ、語順は、N [NUM-CLF] か NUM N の二通りとなる。方言間における語順の違いは認められないが、類別詞が方言間の音対応に応じて音韻的に異なることはある。また、アイヌ語の指示代名詞や不定・疑問代名詞の「これ」「何」「誰」は、類別詞が指示・不定を表す語根に接尾することで派生したものである。このほかにも回数や長さを表すアイヌ語の単位が確認でき、時間や距離、量、お金の単位には、日本語からアイヌ語に借用されたものもいくつか確認される。

Shinsuke KISHIE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokushima), “Means to count nouns in Japanese”

日本語にも、世界の多くの言語と同様、基数(ものの量を計る数)と序数(順序付けを表す数)の区別があり、過去において基数では日本固有の数詞が用いられることが多く、序数には漢数詞が使われたが、現在では、基数にも漢数詞が使用される。日本の和語数詞の方言は、バリエーションが少なく、音声的な変種があるのみで地域差はほとんどないと言っても過言ではない。このことは、恐らく古代においても地域差が少なく、日本祖語の数詞とも近い形式であった可能性が大きい。また、日本語の数詞や助数詞は、本格的に調査が行われたわけではないが、全国の多くの方言辞典での記載がきわめて少ないことからこれらもまた方言が少なく、また地域差もほとんどないとみられる

16:30-18:00 Chair: Hidetoshi SHIRAISHI (ILCAA Joint Researcher, Sapporo Gakuin University)

Rei FUKUI (The University of Tokyo), “Means to count nouns in Korean”

韓国語は類別詞を多用する言語であるが、構文のタイプによっては用いられない場合もある。数詞を用いた構文の種類は大きく分けて、(1)名詞+数詞、(2)名詞+数詞+類別詞、(3)数詞+名詞、(4)数詞+類別詞+属格助詞+名詞、という4つのタイプがあるが、このうち(1)は人間にしか使われず、(3)は共起制限があり、また(4)は書き言葉でしか用いられないというように使用にさまざまな制約がある。したがって最も普通に使われるのは(2)の類別詞を用いるタイプである。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

類別詞の種類は、語種については、固有語、漢字語、外来語など多様であり、特に漢字形態素が用いられるものは数が非常に多い。したがって類別詞の数もおそらく数百に達するものと考えられる。

方言的な違いについては、個々の類別詞の音型が、各方言の音声・音韻上の特徴によって異なりうる以外には、ほとんど存在しないものと考えられるが、これに関してはこれまでに調査報告が行なわれていない。

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), “Means to count nouns in Tai-Kadai”

A型「名詞+数詞+類別詞」がタイ語やラオス語およびそれらと接するシーサンパンナや徳宏傣語に見られ、B型「数詞+類別詞+名詞」が中国およびベトナム領内のタイカダイ語に見られる。これはA型のほうが本来の型で、中国語やベトナム語に接する地域でB型に変化したものと見られる。中国語史においても同様の変化が漢代頃に生じたとされている。また、「一」についてはA1型「名詞+類別詞+“一”」がタイ・ラオス・傣語・海南島に見られ、C型「類別詞+名詞+“一”」が広西のチワン語に見られる。更にD型「類別詞+名詞(+指示詞)」という数詞が現れないタイプがチワン語のうちC型よりも更に狭い地域に分布し、この地理分布からして最も新しく生じた型と思われる。このような数詞をとみなわず類別詞がある種の定冠詞に類するような機能を果たすタイプは中国語南方方言にも広く見られ、両者の関係に興味が寄せられる。

Keita KURABE (ILCAA Joint Researcher), “Means to count nouns in Tibeto-Burman”

チベット・ビルマ系言語では、類別詞を持つ言語と持たない言語が地理的に南北の対立を示す。また、名詞(N)、数詞(NUM)、類別詞(CL)の相対的順序に関して、N-NUM-CLを示す言語は東に、N-CL-NUMを示す言語は中央に、NUM-CL-Nを示す言語は西に分布する。なお、複数の言語において、10の倍数や大きな数詞(3以上、10以上など)が類別詞の有標的な語順を引き起こす。羌系言語、ロロ・ビルマ系言語などにおいて、数詞を伴わない類別詞の用法が確認される。

2月18日

10:00-11:45 Chair: Ray IWATA (ILCAA Joint Researcher, Kanazawa University)

Takashi UEYA (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies), Kenji YAGI (ILCAA Joint Researcher), and Fumiki SUZUKI (Kyoto University), “Means to count nouns in Sinitic”

中国語においては、名詞を数える際、「数詞+類別詞+名詞」という語順になる。この点においては方言間で違いはみられない。ただ、「あの三冊の本」のように数量表現が指示詞を伴う場合、ほとんどの地域が「指示詞+数詞+類別詞+名詞」の語順になるのに対して、中国広西チワン族自治区三江トン族自治県で話される六甲方言のように指示詞が名詞の後ろに置かれる方言もあることを紹介した。これは橋本萬太郎氏が分類す

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

るところのミャオ・ヤオ型の語順である。また、中国語方言の中には数詞を伴わない「量詞+名詞」構造が独立して使用される地域がある。この構造は大きく分けると「定」の意味になるケースと「不定」の意味になるケースがある。今回、試験的に王健(2005)が調査した江蘇省及び安徽省のデータに基づいて地図化を行い、分布特徴を指摘した。

Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University), “Means to count nouns in Hmong-Mien”

ミャオ・ヤオ語族はいわゆる類別詞を持つ言語群であるが、以下のような論点を報告した。(1)数を数える言語行動においては、類別詞は義務的に使用される。(2)その場合の数詞 (NUM) と類別詞 (CLF) の語順は、NUM-CLF である。(3)(2)の構成と名詞 (N) の語順は、NUM-CLF-N である。(4)指示詞 (DEM) は数詞がなくても類別詞と共起できる (ただし、その場合意味的には数量が 1 であることが含意されるのが基本) (5)類別詞と指示詞の語順については、バラエティがあり、東側に分布する言語には、DEM-CLF の語順が、西側に分布する言語には CLF-DEM の語順がみられる。ただし、東側の地域にも CLF-DEM は見られるので、こちらの方がより古い語順なのではないかと推察される。

Atsuko UTSUMI (Meisei University), “Means to count nouns in Austronesian”

This paper presents means to count noun in WMP languages. Some WMP languages lack classifiers that appear when counting nouns, but most of them make use of a classifier that appears immediately after a numeral. There is no exception to the word order Numeral + Classifier in those languages, but there is a variation in the word order NUM + CL and Noun: both Noun + NUM + CL and NUM + CL + NOUN orders are found.

13:15-14:45 Chair: Chitsuko FUKUSHIMA (ILCAA Joint Researcher, University of Niigata Prefecture)

Makoto MINEGISHI (ILCAA), “Means to count nouns in Austroasiatic”

本発表では、オーストロアジア語族の数の表現を概観するための準備段階として、同語族のモン・クメール語族を代表するクメール語 (カンボジア語) と、これと言語系統は異なるが、地理的に隣接し、多くの東南アジア大陸部諸言語の類型特徴を共有するタイ語 (タイ・カダイ語族) との数の表現法の違いを比較した。両言語における名詞句の構成は、およそ「主名詞 (+形容詞) (+数詞+類別詞) +指示詞」として表されるが、類別詞の使用はクメール語では少なく、例外的であるのに対し、タイ語には豊富な類別詞があり、さらに類別詞が照応表現に重要な役割を果たすといった相違があることを指摘した。

Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies), “Means to

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

count nouns in Arabic”

「1」はふつうは数詞をつけず名詞単数形のみで表すが、強調する時は形容詞として名詞に後置し、性を合わせる (Noun+1)。「2」は、物名詞は双数語尾で表し、人名詞は複数形にして「2」を前置する (2+Noun)。古典語では人名詞も双数語尾で表し、強調には「2」を後置し性を合わせる (Noun+2)。「3~10」は名詞の複数形に前置し、「11」以降は名詞の単数形に前置する (Num+Noun)。古典語では、これを限定すると数詞が後置される (Noun+Num)。アラビア語で特記すべき現象は、古典語において3以上の数詞は「性一致の逆転現象」があり、男性名詞には数詞女性形を、女性名詞には男性形を用いる。これは他のセム語でも同じ現象がある。現代語では逆転現象はなく、男性、女性名詞ともに数詞の「接続形」を前置する。また、物名詞の複数形は統辞的には女性単数と扱われ、動詞、指示詞、形容詞が女性単数形となる。ただし現代語では複数で扱われることがある。また一部に集合名詞があり、女性語尾をつけた形が個体を表す。

Mika KONDO (ILCAA Joint Researcher, Osaka University), ““Wind” in Austroasiatic”

Austroasiatic 諸言語の「風」を表す形式は9つに分類される。このうち、最も広く分布するものはCjV¹型であり、これは、予てより関連性が指摘されてきたCjaal型とCjo型の2タイプを含む。地理的分布や、ペアル語西部諸語のChong語に2タイプの中間形式のような形式が現れることから、この2タイプは同一起源である可能性を支持する。

15:00-15:30 Chair: Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University)

2017年度の活動の打ち合わせ

最後に、質疑応答などで全般的に印象に残っている点をいくつか記す。まず、ベトナム語について清水政明氏がベトナムの学者は「数詞+類別詞+名詞」の構造について類別詞がheadであると考えていると紹介された。この点、見かけは中国語も同じ語順なのだが、名詞がheadであり、数詞+類別詞がそれを修飾しているのと異なる。タイカダイ諸語でも類別詞が形容詞や長い修飾句の修飾を受け、名詞がなくとも成立することと軌を一にする。それは修飾語が被修飾語に後ろからかかる語順であることと密接に関わっている。

今回は数詞・類別詞・名詞・指示詞の語順を問題にしたが、将来的には更に形容詞や更に長い修飾語も含めた名詞句全体の構造を扱うことにも発展する大きなテーマであることが感じられた。

また、類別詞がない言語でも数詞が名詞に前置されるか後置されるかについて一様分布であってもきちんと地図化しておくことと類別詞が発達する前の段階を反映するものとして貴重であることが痛感される。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

類別詞が多く見られる言語でも日本語のように借用語が多数を占めることもあり、類別詞の総数とそれに占める借用語の割合なども問題にしてよい。また、今回は語順のみを問題としたが、将来的には固有語の類別詞がどのような意味範疇のものであるかなどについても取り上げることも考えられる。

度量衡については別扱いとして今回は考察の対象としていない。ただ、度量衡も語順については類別詞と同じことが多く、類別詞と度量衡の関係についても更に考察する余地もあるかもしれない。

(遠藤光暁)